

- ⑨ 相手の問題や苦勞に理解を示す表現をする      最近の本人に対するコミュニケーションを振り  
 ⑩ 問題が起きたときは部分的に責任を受け入れる      返し、図表8のそれぞれの項目について、最も  
 ⑪ 現状や問題を誇張せず、ありのままを伝える      適切だと思う番号に○をつける。

図表8. 家族の本人に対するコミュニケーションを評価する

最近の本人に対するコミュニケーションを振り返り、それぞれの項目について最も適切  
 だと思う番号にひとつ○をつけてください。

	まったく できない	あまり できない	どちらとも いえない	ある程度 できる	よくできる
1. ていねいに接する	1	2	3	4	5
2. 明るく前向きな感情を表 す	1	2	3	4	5
3. 話し合いには適切なとき を選ぶ	1	2	3	4	5
4. 文句をいう前にそれが重 要なことかどうか考える	1	2	3	4	5
5. 苦情や文句をいうときは 明確にいう	1	2	3	4	5
6. 相手に変化を望むとき は、批判をやめて、明るく 依頼の口調でいう	1	2	3	4	5
7. 「アイ・メッセージ」を 使う	1	2	3	4	5
8. 見返りを期待せずに、相 手が喜ぶことをする	1	2	3	4	5
9. 相手の問題や苦勞に理解 を示す表現をする	1	2	3	4	5
10. 問題が起きたときは部 分的に責任を受け入れる	1	2	3	4	5
11. 現状や問題を誇張せず、 ありのままを伝える	1	2	3	4	5

(3) 課題 2: いつ誰が本人に治療に関する提案をするのが最もよいか考えてみる (図表 9) (図表 10)

(4) 課題 3: 本人の治療や回復に使える地域資源としてどのようなものがあるか検討してみる (図表 11)

(5) 課題 4: 治療に関する提案をどのように行うか考える

本人に治療の提案をする最良のやり方は、それ

ぞれの家族によって異なるが、一般によいとされている内容は以下の通りである。

- ① なぜ家族が本人を心配しているのか、その現状をありのままに伝える。
- ② 薬物依存症という病気について説明する。
- ③ 家族が本人をととても愛していて、治療や回復のために協力を惜しまないことを伝える。
- ④ 治療や回復の選択肢について説明する。
- ⑤ 選択肢の中から何を選択するか話し合う。

図表 9. 本人に治療の提案をする人

いつ誰が本人に治療に関する提案をするのが最もよいか、これまでの失敗や成功例を詳細に思い出しながら考えてみましょう。

**[治療に関する提案をする人]**

-----  
-----  
-----

図表 10. 本人に治療の提案をするのに良いタイミング

**[治療に関する提案をするのに良いタイミング]**

-----  
-----  
-----

図表 11. 本人の治療や回復を支える地域資源

本人の治療や回復に使える地域資源としてどのようなものがあるか検討してみましょう。また、それぞれの機関でどのようなことが行われているか調べてみましょう。

-----  
-----  
-----  
-----  
-----

上記を参考にして、本人に治療の提案をどのように行うか書いてみる（図表 12）。

#### 4. 「家族の本人に対する関わり方 Vol. 2 長期的な回復を支え、再発・再使用に備える」

##### (1) 目的

- ① 薬物依存症者が治療につながった後も続く長期的な回復の過程について理解できる。
- ② 長く続く回復の過程を支えるために、家族が本人にどのように関わるとよいか理解できる。
- ③ 薬物依存症者が「依存症の考え」と「自律的な考え方」の2つをもっていることを知り、依存症の考えを刺激しないで、自律的な考え方を増やす関わり方について考えることができる。
- ④ 薬物の再使用・再発がどのように起きるかについて知り、家族としてどのように支援できるか考えられるようになる。
- ⑤ 回復の途中で再使用を繰り返すことも多いが、それに振り回されず、長期的な回復を援助していくことの大切さを知ることができる。

⑥ 本人の回復を援助する具体的なコミュニケーションの方法を知り、実践できるようになる。

(2) 課題 1：依存症本人の長期的な回復  
本人が回復の段階のどこにいるか考える（図表 13）。

(3) 課題 2：依存症の回復における家族の関わり方を考える

依存症者は2つの考え方（自律的な考えと依存症の考え方）を持っている。家族は、自律的な考えを助け、依存症の考え方を刺激しないようにすることが大切である（図表 14）。

依存症本人は、依存症の考え方が習慣になっている。薬物から少しはなれると、自律的な考え方が戻ってくるが、依存症の考え方も残っていて、ときどきそちらにひきよせられることがある。2つの考え方をいったりきたりすると、ある時は後悔しても、ある時は平気で使うようになってしまう。

本人が「依存症の考え方」をもっているかどうか検討する（図表 15）。

図表 12. 本人に対する治療の提案の仕方を考える

上記を参考にして、本人に治療の提案をどのように行うか書いてみましょう。



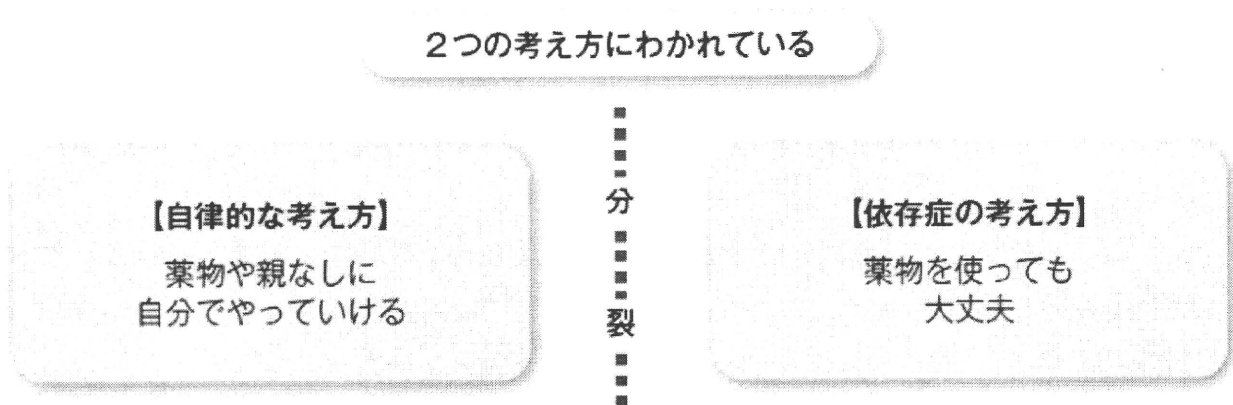
図表 13. 本人の回復の段階

本人は、以下の回復の段階のどこにいると思いますか？ 下の1)～8)の中から選んでください。

- 1) 薬物依存サイクルにはまっており、薬物をやめないといけないという意識がない段階。
- 2) 薬物を減らしたり、やめないといけないと考え始めているが、まだ実際の使い方はあまり変わっていない段階。
- 3) 薬物を減らしたり、止める行動に挑戦しているが、まだうまくいったり、いかなかったりの試行錯誤が続いている段階。
- 4) 薬物を止めることにある程度成功している。止めた期間はまだ短くて、離脱症状もあり、精神的に安定していない段階。
- 5) 薬物を止めることにある程度成功して、心身も安定し始めている。しかし自分が依存症であることを受けとめておらず、リハビリ施設や病院を続ける意識はまだゆらいでいる段階。
- 6) 薬物を止めることにある程度成功して、心身も安定し始めている。自分が依存症であることを受け止め、リハビリ施設や病院などの援助機関で回復への努力を継続できている。ただし、本格的な社会復帰にはまだ早い段階。  
(この段階は、気持ちが行きづまってしまう「壁」の時期となることが多い。現実的な困難や自分自身と向かい合うことでつらくなるが、成長に必要。)
- 7) 薬物を止めることにある程度成功して、回復への努力を続け、社会復帰（自立的な生活や社会的な活動）を始める準備はできている段階。
- 8) 薬物を止めることに成功して、社会復帰（自立的な生活や社会的な活動）でも成果が上がっている段階。再発防止の努力をやめてしまわないことが重要な時期である。

注) 一旦、回復の段階が進んでも、また再使用や再発を繰り返すことがあります。無理に早く進めようとする、再発をおこしてしまうこともあります。

図表 14. 本人の中にある自律的な考え方と依存症の考え方



図表 15. 本人の中にある依存症の考え方

本人は下のような「依存症の考え方」をもっているでしょうか。あてはまるものに○をつけましょう。

- ①薬物のもたらす悪い影響を見ないようにしたり、小さく考える ( )  
「薬物をつかっても別に特に問題ない」「みつからなければよい」  
「今日で最後にすればよい」「ちょっとだけなら大丈夫」
- ②やめられるはずない、自分はだめな人間だ ( )  
「どうせやめることなんてできない」
- ③コントロールできるという思いこみ ( )  
「やめようとおもえばすぐにやめられる」
- ④いいわけを考える ( )  
「あいつがさそってきたから断れない」「今日はおいわいだから」  
「お正月くらい」
- ⑤家族への依存。家族に頼ればなんとかなる。家族のせいだ。 ( )  
「家族に頼っていれば、何とかなる」「家族なしには生きられない」

### 依存症が重いとき

薬物のことばかりになり、周囲の人や生活などはどうでもよくなる。家族に対しても、嘘や言い訳をしたり、お金をもらったりして、薬物を手に入れることしか考えない（図表 16）。

### 依存症から回復してきたとき

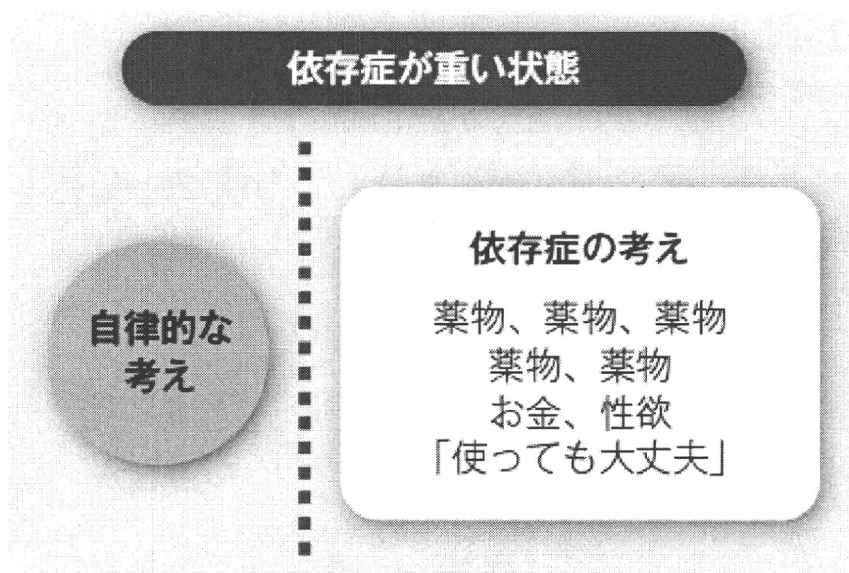
回復が進んでくると、「自律的な考え」が増えてくるが、完全に「依存症の考え方」がなくなったわけではない。このときは家族が関わる好機である（図表 17）。

### 依存症の考え方を助けてしまう関わり

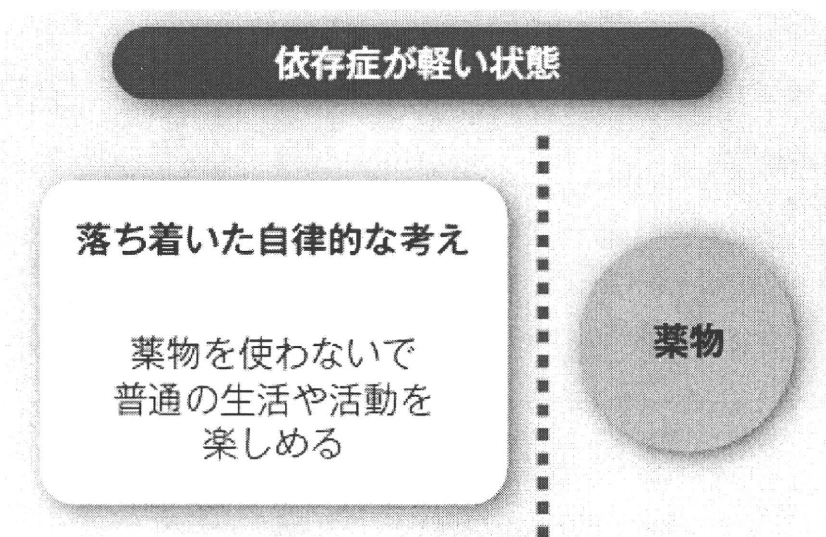
① 依存症の行動を助けてしまうこと＝イネイブリング

アルコールや薬物を用いたために生じる問題（心身の不調、欠勤、対人トラブル、就労が続かないなど）を本人に代わって解決してしまうこと。本人の立ち直りの機会をうばい、自尊心や自立心の成長を妨げてしまう。

図表 16. 依存症が重い状態



図表 17. 依存症が軽い状態



- ② 自尊心を傷つける関わり。上から目線で一方的に非難する。「おまえはダメな人間だ」「世間に顔向けができない」
- ③ 長い議論、説得、脅し、質問攻め  
自律的な考え方を助ける関わり
- ① 無理な要求は断る一方で、気持ちでは応援する。
- ② 見守る。回復を願っていることを伝える。
- ③ ほめること。がんばりを認める。
- ④ 話をきく。不安や苦しみへの共感。
- ⑤ 家族が直接助けるのではなく、回復の場へのつながりを助ける。
- ⑥ 家族会などで家族が元気をとりもどすことが、回復の見本になる。

回復を「助けてくれるもの」と「妨げるもの」について考えてみる（図表 18）。

図表 18. 本人の回復を助ける関わりと妨げる関わり

回復を「助けてくれるもの」と「妨げるもの」について考えてみましょう。家族として、これまでの関わりを表に書き込んでください（これからやりたい関わりや、これから気をつけたい関わりでもかまいません）。

	本人が自分の回復を考える上で重要なこと	家族が本人に関わる上で重要なこと
回復を妨げる「依存症の考え」を強めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレス</li> <li>・不健康な生活習慣</li> <li>・不正直さ、嘘</li> <li>・ひきこもり、孤立</li> <li>・自分を傷つける相手</li> <li>・薬物を使う人、売人</li> <li>・本人の自律的な考えを妨げる家族</li> </ul>	本人の自律的な考えを妨げる関わり
回復を助ける「落ち着いた自律的な考え方」を増やすこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聞いてもらうこと</li> <li>・カウンセリング</li> <li>・正直さ</li> <li>・健康な快感（例：スポーツ、読書、散歩、料理）</li> <li>・健康な習慣（規則正しい生活、顔を洗う、風呂にはいる）</li> <li>・リラクゼーション（ヨガ、呼吸法）</li> <li>・安全な場所や人のイメージ</li> <li>・自助活動（施設、NA）</li> <li>・生きがいをもつこと、幸せになろうという気持ち</li> <li>・信頼できる仲間</li> <li>・本人の自律的な考えを助ける家族</li> </ul>	本人の自律的な考えを助ける関わり

☆家族は影響力が強いので、回復を助けてくれるものと、邪魔するもの両方にはいます。

「最強の味方であり、最大の敵」

☆家族が過保護・過干渉になっていて、もっと本人に任せた方がいいと思うことはありますか？ 手をひくことが難しいのはなぜでしょうか？

(4) 課題 3：薬物の再使用・依存症の再発についての理解と対応

本人の薬の再使用のきっかけや、危険なサインにはどのようなものがあるか考える（図表 19）

再使用・再発にも段階がある。一度使えば、全て台無しというわけではないので、本人も家族もやけにならず、なるべく早く回復の場に戻って、被害を最小限に食い止めることができるよう支援することが大切である。

再使用・再発が疑われたとき、家族としてでき

ることや、逆に避けた方がよいことについて考える（図表 20）。

家族はがっかりするが、やけになって、本人を責めるのは逆効果である。同じ立場の家族と話すなどして落ち着いた気持ちを取り戻す必要がある。また、もう一度病院やリハビリ施設でやりなおすことを勧めるチャンスをさがし、見逃さないようにすることも大切である。他には、アイ・メッセージでそれまでの回復の努力を評価し、それを続けてほしいと肯定的に伝えられるようになることが望ましい。

図表 19. 本人にとっての再使用のきっかけや危険なサイン

1. 本人にとって、薬の再使用のきっかけや、危険なサインは何だと思えますか？ あてはまると思われるものを○で囲みましょう。

〈状 況〉

空腹 (Hungry)   怒り (Angry)   孤立 (Loneliness)   つかれ (Tired)  
忙しい生活   ショックなできごと   不規則な食生活   寝不足や寝過ぎ  
運動不足

〈もの、場所、人〉

薬物の道具 (注射器等)   インターネット   薬を思いださせる場所  
お金   売人   異性・友人・家族との葛藤   職場や学校の人間関係  
家族とのやりとり

〈心の中のこと〉

怒り、いらいら   おちこみ   不安、さびしさ   興奮、盛り上がり  
性欲   完全主義やこだわり   ト라우マの記憶  
その他 (   )

図表 20. 再使用・再発が疑われた時の家族の対応

3. 再使用・再発が疑われたとき、家族としてできることはなんでしょうか？ 逆に、避けた方がよいことはなんでしょうか？

.....  
.....  
.....  
.....



(5) 課題 4：本人の自律的な考え方を助けるコミュニケーションの練習

場面 1：リハビリ施設(病院)でがんばっている途中の本人が、2週間の時点で退所(退院)したいと親に対して言い出した場合

子ども：「もしもし、お母さん、おれだよ。」  
家族：「あ、〇〇〇(子どもの名前) どうしたの。」  
子ども：「もうでるから。」  
家族：「でるって？」  
子ども：「きまってるだろ、施設(病院)だよ。もう2週間もはいて、薬がぬけたから早く出たい。もう大丈夫だから。」  
家族：「でも、薬物依存症を治すには、時間をかけてプログラムを受けないといけないと聞いているけど。」  
子ども：「もう大丈夫だよ。」  
家族：「(続きのセリフを考えます)」

家族は、上記のような場面でどのように自律心

を育てる言い方ができるか考え、メンバー同士のロールプレイを通して実践してみる。

また、今後起こりそうな場면을挙げてもらい、その際の対応について考えてみる。

## 5. 「家族のセルフケア Vol.1 家族のセルフケア」

### (1) 目的

- ① 薬物依存症者の回復を支援する家族にとってセルフケアが重要であることを理解できる。
- ② 今、必要な支援について家族自身が理解し、それを得るために行動できるようになる。
- ③ 家族が既に持っているセルフケアの技術について確認する。

### (2) セルフケアの重要性

薬物依存の本人と密接にかかわる家族がどのような悪影響を受けるかについて、家族が具体的に理解し、また、家族が心身の健康を取り戻すことの重要性を理解できるよう解説する(図表 21)。

図表 21. 家族が受ける様々な影響

薬物依存の本人と密接にかかわる家族はどのような影響を受けるでしょうか？

ここに挙げたものは非常に多く見られる影響の例です。これらを体験することは決して恥ずかしいこと、弱いことではありません。

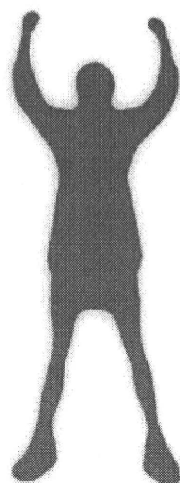
あなたにも当てはまる項目がありますか？

ケア労働(本人の看病・世話・他の家族を支えること)

身体面(不眠・動悸・胃腸障害・頭痛・怪我など)

地域のコミュニティからの孤立(うわさ・批難を恐れる)

感情面(不安・あせり・自責・不信・疑い・無力感・うつ・混乱)



トラウマ(外傷)体験(本人が普通でない場面を見る・暴力をうけるなど)

信頼関係の崩壊(お金を取られる・物を売られる・債務の立替を求められる)

本人の起こしたトラブルへの対処(借金・けんか・恋愛関係・雇用関係・停学退学など)

コミュニケーション不全(連絡が取れない・不機嫌・怖い・言い争いなど)

司法(事件に発展する不安・逮捕・裁判)

(3) 課題1：家族自身の生活の点検  
 家族の生活の諸側面を示す様々な項目について、現在の自分の満足度を検討してみる（図表

22）。また、十分な満足が得られていない項目については、満足度があがるために、どのようなことが必要か具体策についても検討する。

図表 22. 家族の生活の満足度をチェックする

良い援助が出来る状態であるためには、まず自分のニーズを満たすことが重要です。次のリストを用いて、自分はどれくらい満足できる状態なのかを確認してみましょう。そして本人の支援を有効に行うために、後半の質問について考えましょう。

生活の諸側面を示す次の項目について、全く不満足（0点）から完全に満たされている（10点）の間で自分の満足度のチェックをしてみましょう（各項目について、その点数をつけたのはどのようなことからか、なるべく具体的に説明できるようにしてください）。

1、私のお酒や薬との付き合い方	0 ————— 10
2、私の仕事や教育の状況	0 ————— 10
3、私の経済面・金銭面の状況	0 ————— 10
4、将来の見通し・計画について	0 ————— 10
5、友人づきあいや趣味・楽しみ	0 ————— 10
6、本人を含む家族関係の状況	0 ————— 10
7、法律や司法に関する事	0 ————— 10
8、私の気分・感情の状態	0 ————— 10
9、暴力を受けず安心できる生活	0 ————— 10
10、私の健康の維持・回復	0 ————— 10
11、全般的な幸福感	0 ————— 10

次に、上の項目の中からひとつ選び、この状態がどうなると良いか、また、自分のために実際に出来そうな行動や必要な援助などについて考えてみましょう。

(4) 課題2：適切なサポートを求める  
 家族が困ったとき外部にサポートを求めることは恥ずかしいことではないことを説明する。  
 また、家族は、具体的な問題について、どのよ

うな助けが得られるとよいか考えてみる。そのため  
 の障壁となっていることがあれば、どのように  
 して障壁を乗り越えるかについても検討する(図  
 表 23)。

図表 23. 家族にとって必要なサポートを得る

困難な場面や状況において、助けを求めることは恥や弱さと感じる方もいるかもしれません。馬鹿にされたり、嫌がられると考えるかもしれません。しかし、実際には多く的人是に他者を助けられることに喜びを感じるものです。助けを求めることは勇気ある前向きな行動なのです。

依存症の回復までのプロセスを消耗せずにうまく乗り切っていくためには、家族にとって適切な支援（サポーター）を得ることが重要です。課題2ではこの点について取り上げます。

今後予想される自分だけで対応が難しい場面や、手助けが必要な状況はどのようなもの  
 でしょうか？例を参考にいくつか挙げてみましょう。

次にそのような場面や状況で、どのような人からどのような助けが得られるとよいのか  
 考えてみましょう。さらに、その支援をこちらから求めにくいのだとしたらそれはどのよ  
 うなことが障壁となっているのか、どのようにその障壁を乗り越え、どのように支援を求  
 めるかを考えましょう。この課題は実際にその場面になったときに慌てず、行動できるた  
 めの準備です。

手助けがほしい時 は？	誰に（どの機関に） どんなことを手伝っ て欲しい？	手伝いを頼みにく く、頼むことへの障 壁がある？	どんなふうに頼む か？その障壁の乗り 越え方は？	その人（機関）はど んな反応をするで しょう？
例：夜中に本人が 帰ってこない時。	例：Aさんに話して 不安を鎮めてほし い、だめなら誰でも いい。	例：夜中に電話する のは失礼と思って遠 慮する。	例：Aさんに前もっ て頼んでおく。メー ルならよいかも。電 話相談の利用もあり うる。	例：夜中は対応でき ないかもしれない。 でもメールを書いた だけで気分が変わる かも。

(5) 課題 3: 家族がすでに持っている力を確認する。

下記の①から③の視点で、家族にこれまでの生活を振り返ってもらい、家族自身もセルフケアの力や技術を確認する。

- ① これまでに、これ以上強いストレスを感じるから自分を守るためにどんなことをやってきましたか？何が役に立ちましたか？
- ② 本人の使用や問題行動が悪化したときにも、あなたの生活の質を維持し、本人を支援する気持ちを持ち続けることは非常に重要なことです。本人が薬物を使用しているにも関わらず、比較的安定した気分でした過去の出来事を思い浮かべてみましょう。その時は何が違っていましたか？
- ③ これまでどんな方法で絶望的な感情に対処してきましたか？今後も用いることが出来るあなたの資質や知恵、力はどのようなものでしょうか？

## 6. 家族心理教育プログラムの普及

### (1) 対象

平成 21 年度の調査において協力を得られた医療機関 (19 機関)、精神保健福祉センター (47 機関)、保健所 (99 機関) を対象に、「薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 実施者向け研修会」の案内を送付した。その結果、43 名 (32 機関) からの参加が得られた。

### (2) 研修会の実施

平成 23 年 2 月 25 日 (10:00~17:00)、TKP 東京駅八重洲ビジネスセンター (カンファレンスルーム 2A) にて、「薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 実施者向け研修会研修会」を実施した。

## D. 考察

薬物依存症者をもつ家族にとって必要な学習内容について、主に欧米の文献を検討したところ、これまでの我が国の家族支援の中であまり提供されてこなかった学習内容が数多く見出された。これらの内容を盛り込んだ包括的な家族心理教育プログラムの開発を目指し、今年度は 5 種類の冊子を作成した。

「プログラムを実施する前に」には、プログラ

ムの実施に関する事項はもちろんのこと、薬物依存症者の家族支援を行うことの重要性や、家族支援を行う際の留意点も広く盛り込んだ。また、家族心理教育プログラムの全体像を明示した。

「薬物依存症と回復 Vol.1 薬物依存症とは」では、薬物依存症やその回復について、家族がその基本を理解できるよう努めたが、その中でも特に、薬物をやめることの難しさについて様々な角度から理解することや、回復のためには、社会機能や対人関係の改善等が重要であることを理解することなどに重点を置いた。

「家族の本人に対する関わり方 Vol.1 上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる」では、主に初期段階の家族、つまり、まだ本人が治療につながっておらず、薬物使用に関連する様々な問題に巻き込まれて消耗しているような家族を念頭に教材を作成した。ここでは、本人の回復支援のためには、コミュニケーション・スキルの向上が大切であることを家族自身が知り、そのための行動を起こせることと、治療の提案を効果的に行うことに主眼を置いた。

一方、「家族の本人に対する関わり方 Vol.2 長期的な回復を支え、再発・再使用に備える」では、中段階以降の家族、つまり、本人が治療につながるなどして回復の道を歩き始めた家族を念頭に教材を作成した。ここでは、回復過程において、家族が本人の自律的な考え及び行動を強化することの大切さを強調するとともに、実際にはそのような関わりが難しいことから、ロールプレイなど家族の言動が実際に変化することを目的とした課題に力点を置いた。

「家族のセルフケア Vol.1 家族のセルフケア」では、本人の回復を支援する家族にとってセルフケアが重要であることを家族が認識できるだけでなく、実際にどのようにしてセルフケアを行うのか検討したり、必要な支援を求める方法を検討したりする課題を設けることにより、実生活において家族のセルフケアが促進されることを目指した。また、人が気づかないうちにすでにもっている力に着目する課題を通して、家族のエンパワメントを目指した。

以上、本プログラムには、これまでの家族集団教育の場であまり行われてこなかった特徴がいくつかある。ひとつは、本人に対する家族の積極的な関わりに関する内容が多く盛り込まれてい

ることである。これまで我が国で行われてきた家族への支援は、「家族が本人の問題を肩代わりすることをやめて問題を本人に返すことを徹底することが本人の回復への決意を促すので、家族は本人の問題から手を引き、消耗した家族自身のケアを行うことが必要である」といった内容が中心であった。しかし欧米では、家族が本人に対して積極的に働きかけることで、本人の治療導入を促進し、良好な予後につながると考えられ、実際に大きな成果を上げている。今後は、我が国においても同様の視点で支援を充実させていくことが求められよう。

特徴の二つ目は、本プログラムは、家族が必要な知識を身につけられるだけでなく、それらの知識に基づき、実際に家族の生活や本人に対する言動を変えていけるよう工夫されていることである。家族にとって、薬物依存症という病気や回復を促進するために必要なかわりについての知識を得ることは非常に重要である。しかし、家族が実際に、本人の回復を支援する重要な役割を果たし、また、消耗した家族自身の心身の健康を取り戻すための方法を実行に移すためには、知識の獲得だけでは不十分である。家族が各々の生活の中で、得た知識を活かしながら行動を変えていくことができるには、そのための方法を知り、更に、実際に練習してみることが重要になる。そのため、本プログラムには、学んだことをそれぞれの家族の生活の中で活かしていくための課題がいくつも含まれており、家族の実際の行動の変化を目指しているのである。ただ、集団教育の場では、その練習には限界が多い。援助者は、個別相談の場を利用するなどして、練習を更に発展させたり、その効果について振り返りをする機会をもつことが必要である。

今後の課題としては、まず、本プログラムの普及活動である。今年度は、一度の研修会実施にとどまったが、来年度も各所で研修会を行うなどして普及に努めたい。

また、今後は医療及び保健機関、家族会などに協力を依頼し、家族心理教育プログラムの有効性評価に関する調査研究を進める必要がある。

更に、今年度の教材に含めることができなかった学習内容については、今後も随時教材を作成し、本プログラムの充実に努めたい。

## E. 結論

薬物依存症者をもつ家族の多様なニーズに対応できる包括的な家族心理教育プログラムの開発を目指し、教材の作成に着手した。今後は普及活動やさらなる教材の充実に努めるとともに、効果評価のための調査研究も実施したい。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

### 3. その他

なし

## G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

なし

## 文献

- 1) 薬物乱用対策推進本部「薬物乱用防止新五か年戦略」平成15年7月（平成19年8月3日一部改正），内閣府政策統括官（共生社会政策担当），[http://www8.cao.go.jp/souki/drug/sin5\\_mokuji.html](http://www8.cao.go.jp/souki/drug/sin5_mokuji.html)
- 2) 薬物乱用対策推進本部「第三次薬物乱用防止五か年戦略」平成20年8月22日，内閣府政策統括官（共生社会政策担当），<http://www8.cao.go.jp/souki/drug/sanzi5-senryaku.html>
- 3) Meyers, R. J., Miller, W. R., Hill, D. E., Tonigan, J. S.: Community reinforcement and family training (CRAFT): Engaging unmotivated drug users in treatment. *Journal of Substance Abuse* 10: 291-308, 1998.
- 4) Garrett, J., Landau-Stanton, J., Stanton, M. D., Stellato-Kabat, J., Stellato-Kabat, D.: ARISE: A method for engaging reluctant alcohol- and drug- dependent individuals in treatment. *Journal of Substance Abuse* 14: 235-248, 1997.
- 5) 嶋根卓也：〔小児科医のための思春期医学・

医療] 思春期における生活サポート 思春期における薬物乱用の実態とその予防. 小児科, 50:1923-1929, 2009.

- 6) 近藤あゆみ: 薬物依存症者の家族がもつ多様なニーズを満たすための家族教育プログラムの開発に関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究」, 2010.
- 7) Shoptaw, S., Rawson, R. A., McCann, M. J., Obert, J. L.: The Matrix model of outpatient stimulant abuse treatment: evidence of efficacy. *J Addict Dis*, 13:129-41, 1994.
- 8) Matrix Institute: The Family Unit A 12-session Alcohol and Drug Education Program for Families, Hazelden, 2005.
- 9) Smith, J.E., Myers, R.J.: *Motivating Substance Abusers to Enter Treatment: Working With Family Members*. Guilford Press, New York, 2004.
- 10) Phil Harris: *The Concerned Other: How to Change Problematic Drug and Alcohol Users Through Their Family Members: a Complete Manual*, Russell House, 2010
- 11) Fals-Stewart, W., Klostermann, K.: *Group Psychoeducational Attention Control Treatment: A 10-session Lecture Series (1 introductory session & 9 group sessions)*. Buffalo, New York, Addiction and Family Research Group, 2004.
- 12) 再乱用防止資料作成委員会: 薬物問題相談員マニュアル, 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 東京都, 2007.



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# プログラムを 実施する前に

薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム

ファシリテーター用マニュアル



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 薬物依存症とは

薬物依存症と回復 Vol.1

薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム

家族向け教材





薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 薬物依存症とは

薬物依存症と回復 Vol.1



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 上手なコミュニケーションで 本人を治療につなげる

家族の本人に対する関わり方 Vol.1



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 上手なコミュニケーションで 本人を治療につなげる

家族の本人に対する関わり方 Vol.1



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 長期的な回復を支え、 再発・再使用に備える

家族の本人に対する関わり方 Vol.2